

覚せい剤やシンナーなどの薬物依存者の完脱を手助けする民間施設がある。「タルク」(DARC)。依存症のスタッフらと患者が共同生活し、互いに思いや体験を語り合うことで、薬に手を止める日を一日ずつ積み重ねていく。その取り組みは、精神科医も驚くほどの効果を見せている。瀬戸内市島久町福中の「岡山タルク」を取材した。(小畑誠)

依存者受け皿施設「岡山タルク」

タルクは1985年に東京で誕生し、全国約60カ所に広がった。岡山タルクは2009年12月に開設。今日一日薬をやめる「を白黒」に、現在、依存症で苦しんだ経験を持つ千坂雅徳施設長(52)をはじめ、20〜60代の男性約10人が借家で暮らしている。

活動の中心に置いているのが全員参加のミーティングだ。原則朝々2回、各1時間半ほど開き、発表者以外は黙って聞かされる。討論しないことで、正直になってもうまい狙いがあるという。

「売人までやった」

1月下旬、ミーティングをのぞいた。全員が広めの部屋に集合。順番に前に出て、思い思いに身の上を話す。

「幼い頃、アルコール依存症の父に『おまえのせいだ(母親)別れたんだ』と言われたことが忘れられない」「親に愛されられ、友達もいる弟がうらやましく、いじめられた」

一方で衝撃的な言葉も語られる。「薬を置く金欲しさに売人までやった」「薬の不法所持で何度も捕まった」。発言からは、やめたくてもやめられなかった苦悩がうかがえた。終了後、通称・ノリカズさん(47)「大阪府出身」に話を聞くと、「初

瀬戸内

自分さらけ出し薬物断つ

めは「たなご」おられるかって感じもったと振り返る。「ひと仲間の話も聞かなくて」「自分も正直に話したら薬はなくなるかなあ」と。その通りにしたら、不思議と気が楽になってね。薬への強い欲求もなくなった」

千坂施設長も「何もかも失い、誰かに心を打ち明ける機会なんてほとんどなかった私たちは、ため込んだものを



岡山タルクのミーティング。参加者は話を聞いて、発表者の話を耳を傾けていた。1月下旬、瀬戸内市



2月4日
月曜日

毎日全員参加ミーティング 「心を明かす」重ね効果

吐き出す必要がある。仲間の話は共感できる部分も多く、励みにもなる」と強調する。

自尊感情得る

依存症外来を持つ岡山県精神科医療センター(岡山市北区鹿田本町)の担当医・河本泰信医師(52)によると、薬物依存症は「脳の病気」といふ。薬を使用したことで、ストレスや怒り、孤独感などの強迫観念にかられた時、薬を強烈に欲するようになる。配線が作り替えられてしまうので、「意志の弱さの問題ではない」と指摘する。だから「タルクの取り組みの成果は驚きという」。

岡山の場合、ノリカズさんは薬の未使用歴が1年半、千坂施設長は10年を超えた。開所以降入った24人の中で、施設にいる間に再使用した人はいない。

河本医師は「みっともない人、どうしてよもうない自分をミーティングでぶちまけて、正直に向き合う。そのとを初めて『自分はこれでいい』『自尊感情が得られ、欲求に立ち向かう気持がえられるのでは』と分析。これまでも依存症患者の受け皿としてタルクを紹介しており、「医療と施設の連携を一層深めて回復に努めたい」と話している。